

下の處女などと結婚すると萬事に母親を標準にして細君に小言ばかり言ひ勝ちである。また女の兒が餘りに母親に鍾愛せられると、之が爲に同性愛的傾向に陥ることは男の兒よりも更に甚だしい。母親にばかり愛せられて父親の愛を経験しないと、柔軟な女性と接觸する快味のみで馴らされて、男性の粗剛な感觸を不快に感ずるやうになる。其の結果女兒は成長して異性を慕はなくなり、男子と結婚しても夫に對して小言を絶たない。それでは父親が子女に甘い場合は如何といふに、父親に鍾愛せられる女兒即ちエレンケイ型の娘は、父親以外の異性を輕蔑して、結婚するにしても父親に酷似した夫でないと氣に入らない。また其の子が男の兒だと、男性の愛のみに満足して、異性の愛に冷淡になる。故に、父親にせよ、母親にせよ、片親のみに鍾愛せられる子女は不幸であつて、小兒は父親と母親との双方から適當な愛を受け、彼等を適當に愛慕しなくてはならない。「父さんが好きか母さんが好きか」とか「父さんの子か母さんの

子か」といふが如き馬鹿げた無用の愚問を發して小兒の愛情を偏らせるのは甚だ悪い事である。殊に母親と子女との關係は父親と子女との關係よりも密接であるから、母親は特に此點に注意しなければならない。

しかしフロイドは右に叙べたよりも更に恐るべき事實を吾々に説明する。右に叙べたのは父母が子女を酷愛する場合であるが、之と反對の現象として、父母と子女との間には憎惡の關係が存在する。而も是れこそエディプス交錯としては一層重要なものであつて、母親を愛慕する男性は愛の競争者として父親を憎惡し、父親を戀慕する女性も母親を嫉妬する。大抵の家庭的悲劇には此の關係が陰に陽に存在するのみならず、其他の精神的疾患や社會的病弊にも此の關係が重要な原因を成して居る、これ即ちフロイドがエディプス交錯を以て有らゆる精神生活の最大禍因と爲した所以である。

三 ユンクの説

ユンクの説はアドレルよりもフロイドに近いが、しかしフロイドの説とは聊か赴きを異にする。彼は小兒にフロイドの所謂渴望の存在する事は認めざるが、之を性慾のみでは説かない。フロイドの性慾も廣義なものであるが、如何に廣義でも小兒の生長心や向上心や發展心や競争心を性慾の一語で形容するのは妥當でない、といふのがユンクの見解である。フロイドの説によれば、男子でも女子でも幼少時代には男性的であるが、青春時代に至つて男性が女性に倒錯したり或は女性が男性に倒錯したりする、さうして其の原因は幼少時代の境遇や教育や經驗に由るといふ。如何にも兩性倒錯の傾向は既に幼少時代にも存在するが、しかし之と共に自性發展の傾向も亦た顯著に存在する。故に性慾の倒錯を幼少時代の事情のみによつて説明するのは妥當を缺く。殊に幼少時の習慣と成

人後の性格との關係に就いては、ユンクはフロイドと大いに説を異にする。精神病者の中には幼少時代に於て既に變態的傾向を示し、成人後に至つて之を誇張する結果一層病的になるといふ類の者も多い。さうして其の原因が父母の溺愛又は冷酷に在る例も少なくない。幼兒は主として兩親に養育せられるのであるから、彼等が兩親に受ける感化の大なることは勿論であるが、しかしながら小兒の心理は大體に於て無意識的であるから、その受ける感化は其の割合に大ではない。殊に父母の性的差別には比較的無頓着で、父は男で母は女だといふやうなことをそんなにハッキリ意識するものではない。大體は之を識別するにしても、男女の區別の如何なるものかを、そんなに善く理解する者ではない。小兒は父母を男女とよりは人間と思つて居る。母親が父親を大切にすると、小兒は嫉妬を起して母親に色々なことをせびる者であるが、これも實は母親から挑発せられるのであつて、必ずしも小兒の本性から自然と發動するのではない。

殊に小兒は性慾よりも我慾の強い者であるから。嫉妬心よりも寧ろ獨立心の方が強い。父親を嫉妬する觀念よりも兩親と獨立する觀念の方が強烈である。前に一言した如く、アドレルは（フロイドも）精神疾患の原因を過去に求めるが、ユンクは之を現在に置く。即ち其の説によれば、人が精神病に陥るのは、意思が薄弱で、或る目的を遂行しようとしても、之を敢行するの勇氣が無くて、目的の前に潜伏する結果であつて、その原因は現在の事情に在る。若し其の原因を過去に求めるとすれば、それは其人の意思を薄弱ならしめたのが過去の原因だといふに過ぎない。さうして其の意思の薄弱な情態は小兒の態度に類似するから、何となく疾患の原因が幼少時代に在る如く見えるのである。それでは何故精神病患者の心理は小兒に類するのであるかといふに、其は現實に對する不満を慰藉する爲に子供臭い空想に耽るからである。大人の心理にも多少は子供臭い心理が在る。アリストテレエズは「女子は男子と小兒との中間に在る」と言つたが、如何にも其の通りで、父親の心理には母親と小兒との心理があり、母親の心理には子供の心理は有つても父親の心理は無い。これは父親の心理的感化は妻子に及ぶが、母親のは子供だけにしか及ばないからであつて、ユンクの弟子のフェルストが二十四個の家族に就いて研究した結果によれば、その人員は約一百名であつたが、その性格感化の關係を試験すると、兩親の性格と子供との間には密接な關係があつて、而も母親の性格は大抵結婚後數年間に父親によつて陶冶せられて、兩者の反動の差は一・四%を出てない。女尊男卑とさへ言はれる（實際はさうでないが）西洋に於てすら然りとすれば、東洋では更に甚だしいであらう。尤もアメリカは例外かも知れない。とにかく小兒の心理は大人から産出せられるのであるから、大人の心理には小兒的心理も在る。故に精神病患者の心理が小兒に類するからとて、精神病の原因が幼少時に在るとのみは解せられぬ。

四三説の綜合

右の如く、變態心理乃至精神疾患の原因を説明するのに、アドレルは慾求の不滿と器官の薄弱とを以てし、フロイドは幼時の性慾殊に親子の戀愛を以てし、ユンクは二人が發病の原因を過去乃至幼時に求めるに反して之を現在に認め意思の薄弱が發病の原因だと説明する。斯様に三人に各自多少の意見を異にするが、しかし之等の意見は全然相容れないのではない、その根本は寧ろ共通であつて、之等の諸説を綜合したものが多分眞理に近いのであらう。

そこで大いに注目すべきは「エデツプス交錯」に對するアドレルの見解である。エデツプス交錯に關するフロイド及びユンクの説は右に叙べた如くであるが、アドレルの説は之と少しく趣きを異にする。其の説に依れば、今日の社會では男尊女卑の思想が一般に行はれて居る結果、男女の間に強弱、上下、治被

治、安不安の差別對立が存在する、其差別對立が餘りに不自然不正當であるが爲に、不自然不健全な心理が發生せざるを得ぬ。健全な者でも病的な者でも、とにかく人間は一般にニイチエの謂はゆる「強からんとするの意思」アドレルの謂はゆる「他を凌がうとする意思」を具へて居る。さうして其の意思を發揮するには、健全な者は唯だ單に自己の目的とする所に向つて努力すれば良いのであるが、病的な者は自己に弱點が有る爲に、又は自己に弱點が有ると信ずるが爲に、中途で意氣が沮喪したり、或は最初から絶望に陥り易い、尤も此の作用は必ずしも有意識的に行はれるとは限らない。病的な者や意思の薄弱な者は自己の意思の薄弱な原因に無知であり易い者であるから、右の作用も無意識的に働く事も多いが、とにかく自己の劣弱を感ずる所から、事に臨んで最初又は中途から早く已に失敗を豫期する、さうして失敗した時には如何しようかと辯解の口實に腐心する。ナポレオンは「何故常に勝つのか」と問はれて「私は決して

負けるといふことを考へない」と答へたが、意思の弱い者は自分で自分が負ける者と信ずるから負けるのである。成功に努力しながら失敗の口實に腐心するやうでは、十分に成功する筈が無い、何事にも「必ず此事に成功する」と無理にも確信することが必要である。しかるに意思の弱い者又は理性的の暗い者は行為の途中で失敗の口實に腐心する。その口實や辯解が種々の空想や妄想となるのであつて、その自己の作つた妄想に欺かれて之を信ずるやうになると、これ即ち精神病者である。即ち精神病者は自己の妄想で自己を偽瞞して居るのであるが、精神病者は自己を偽瞞しても分析學者を偽瞞することは出来ない、しかるに今日の社會では女子は男子よりも弱い者とせられて居るから、女子又は女性的な男子に精神病的傾向が著しい。そこで精神病的傾向が性的關係と結合し易い。さうして性的關係乃至意思教育は幼時に於ける家庭乃至親子の關係に負ふ所が甚だ多い。エデツプス交錯は此種の事情から成立するのである。

右の如く考へて來ると、アドレルの説はユンクの説ともフロイドの説とも接近して、三人の説が之によつて融合せられる。病的な少女が父親に鍾愛せられると、母親に對して優越感を抱くやうになる。しかしこれは彼女が病的だからであつて健全な少女ならば、父親に寵愛せられても、左程には感じないが、病的な少女は自己の劣弱を感じずる所から、偶々父親に殊愛せられると、之によつて多大の慰藉を得るのみならず、實は其の慰藉が昂じて一種の妄想と化し、自分が父の妻であるかの如く妄想するやうになる。これ即ち親子戀愛の發生する所以であつて、近親相姦の觀念は先天的であるよりも寧ろ後天的である。近親以外に戀愛の對象が得られぬ時に、近親の内に戀愛の對象を求めないのである。先天的根本的なものは性慾よりも寧ろ我慾であつて、自我の優勝を渴望する我慾が性的方面に於て（又は其他の方面に於て）正當に發揮せられぬ時は、異常な性慾と化するのである。病的な少女は父親に鍾愛せられることによつて我慾

と安慾との満足を得るのであるが、それは到底健全な満足の方法ではないから、やがては一轉して病的な性慾と變化する。彼女の不安の度によつて、彼女の妄想は益々頑強の度を加へるが、由來人間の思惟作用は象徴的抽象を好むものであるから、患者は分析學者も動もすれば近親相姦といふが如き光景を想像し易いのだ。これはアドレルがエデツプス交錯を批判すると共にフロイドの極論を諷刺した言であるが、とにかく幼少時代に於ける境遇や養育の不良乃至其他の事情の不良は後年の性格に重大な禍因となるものであるから、子女を養育又は教育する両親や教師は大いに此點に注意しなければならぬ。自體の虚弱な小兒や、容貌の醜惡な小兒や、餘りに嚴格に育てられた小兒や、餘りに甘く育てられた小兒は、精神病の候補者であつて、後年何等かの困難に面接すると、健康な小兒や美麗な小兒や快活な小兒や敏捷な小兒に比べると、意思が薄弱であるから、動もすれば困難との力闘を回避して、両親の膝を慕ひ易く、之

が爲に子供臭くなる虞がある。偉人の子が却つて不肖であるのは、子が親を崇拜又は模倣しないからではない、事實に於て模倣しないで空想に於て模倣するからである。殊に其の子が肉體又は容貌又は意志又は理性に於て薄弱であると單に親に肖ないのみではない、常人にも劣つた者になり易い。これは普通の父母を持つた普通の小兒にも或る程度までは有る事で、子は親のやうに又は親よりも偉くとか美しくとか成らうとの欲求を具へて居るが、何等かの事情で其の事が困難又は不可能だと考へるやうになると、その不満に對する慰藉が轉じて病的な妄想と化し易い。故に子女を養育するには實に細心な注意を要する。前に叙べたやうに、人間の根本慾には食慾も色慾も安慾もあるが、之等の諸慾は截然と區別せられるのではなく、それが混合して我慾となるのであつて、男の子が母に又は女の子が父に鍾愛せられせる場合には、之等の諸慾が夫々に健全に又は病的に満足せしめられるのである。故に其の一斑を以て全豹

を推すのは誤りであつて、吾々はフロイドの説にもユンクの説にもアドレルの説にも偏してはならぬ、彼等は唯其の一面を強唱したのだと解すべきである。しかし彼等は各自に精神病因の三大重點を捕捉して居るのであるから、之を綜合して三種の方面から觀察すれば、大過無きに近いてあらう。此の事は曩に研究した夢の心理や傳説の性質に就いて考へて見ても分る。エデッブスが父を弑し母と婚したのは、單に性慾のみの爲てはなかつた。彼の父が彼を棄てたのは、彼の方を恐れたからであつて、此の父と子との争闘は寧ろ權力慾の爲であつた。サルゴンが「母は貞女であつたが、私は父を知らない」と言つたのは、父の卑賤を耻ぢた名譽心の爲で、イエスがヨセフの子ではない、ヨセフがマリヤと婚約した間に胎まれたなどと言はれるのも、やはり救世主の神聖を要求する名譽心の爲であらう。スキデン王アンは九年目毎に我子を一人づゝ殺して自己の壽命を九年づゝ延ばしたと言はれるが、これも性慾ではなくて長壽慾とも

いふべきであらう。ジイグフリドが愛母を亡つて其の代りに叔母を戀ふるのは、これ亦性慾よりも安慾の爲であつた。ジイグムンドが敗戦し負傷して妹の深切な介抱を受け、妹を戀したのも、亦之と同じ理であつた。「火の鳥」のイワンは父と争闘したのではない、寧ろ柔順に父の命に従つて冒險に出たのである。彼は唯二人の兄を凌いで王位を嗣がうとしたに過ぎない。故に性慾のみでは心理を説明し難い。種々の慾望で之を説明しなければならぬ。しかし種々の慾望は往々にして性慾に變じ易い。これは人間の心理が親子の間の性的關係に感化せられることが多いからである。

第十一章 神經病と精神病

一 神經衰弱症

普通に精神病はヒステリー、憂鬱症、神經衰弱症、神經癱瘓症、動脈不髓症、酒精中毒症、其他種々に區別せられるが、之等の區別は眞に科學的な分類ではなくて寧ろ便宜上の稱呼に過ぎない。如何なる精神病でも、純然たる一種の精神病なのではない、多少とも種々の精神病を兼ねて居る。唯其の中で特に顯著な病症を標準にして之を種々に分類するまでのことである。

謂はゆる精神病は之を精神病と精神病とに區別しなくてはならない。フロイドは之を眞正の精神病と心理的、神經病とに區別した。即ち神經衰弱及び不安病

は眞正の精神病であつて、其他の精神病は心理的、神經病である。何故後者を「心理的」といふかと問ふに、フロイドは曰ふ「世人は容易に信じないが性慾の作用は化學的作用と性質を同じうし、性的化学作用に障礙が起ると、眞正の精神病では肉體の上に反應を示すが、心理的、神經病では心理の上に反應を呈する。」前者は生理的であり、後者は心理的である。

フロイドは精神病の原因が性的渴望の不滿に在ると説くが、之を性慾といふのは餘りに狹義であるから、アドレルは寧ろ我慾の不滿が正當な出口から反對の方向に發動するのだと解釋する。たとへば精神病の婦人が氣の荒い女になつて男性的な行動に出るのは、婦人としての慾求が正當に満たされぬ爲に、その反動として女性に最も薄弱な方面、即ち男性的方面に、其の慾求が發動するのである。故に其の原因は本來性慾に在るのではない、我慾の不滿が性的方面に發動するのである。しかし舊式な精神病學で、精神病と精神病とを區別しない

て、ヒステリイでも精神病でもないといふ様な疾病を大ざつぱに神経衰弱といふ部類に投込んだのは誤りであつて、フロイドの説によると、ヒステリイや神経衰弱症は神経病であるが、其他のものは精神病である。即ち神経衰弱の病症として數ふべきものは、頭痛、胃弱、脊髄、刺撃、消化不良、軽度痲痺、精力減退、意氣銷沈であつて、その原因は性慾的妄想の爲に欺かれて性慾的満足が容易に得られる如く妄想するに在る。事實よりも妄想で性慾が容易に満たされるところと思ふから、實際的意識が薄弱になつて、不自然に性慾を慰め、之が爲に精力を消耗し、生理的疾患に陥るのである。故に神経衰弱者は現實を回避し、社會を嫌惡し、男子ならば婦人を忌み、女子ならば男子を忌み、ひたすら妄想や空想の世界に棲隠しようとする。

不安神経病の特徴としては、患者は一般に心が苛々したり誇大な妄想に囚はれたりして、之が爲に不眠症に陥つたり、色々な事を大袈裟に心配したり、或

は身體の種々の器官に障礙を來したりするが、就中最も顯著な特徴は眩暈である。フロイドの説によれば、之等の病症の發生するのは、やはり性慾が根本の原因で、その性慾が特殊の形式で發動すると、呼吸や動悸や發汗や充血の昂進を來すのである。普通には過勞が不安症の原因だといはれるが、フロイドが言ふには、醫者は此種の患者に向つて「餘り仕事に精を出したからだ」とか「餘り家事に忙殺せられたからだ」と告げたのみでは良くない、文明の今日相當の教育を受けた者が、自分の仕事に出精したからとて、之が爲に病的にならう筈は無い、「仕事や家政に忙殺せられて性的生活を無視又は輕視したからだ」と告げるが宜しい。性慾の満足を得ない男子や男子の性交不能の爲に不満を感じる婦人は不安に罹り易い者である。

ニヒステリイ

心理的神経病の兆候としては、ジャアネエは恐怖、疑惑、顔面痙攣、煽動、恐怖、觸覺妄想、煩悶、神經衰弱、驚異、人格分裂（タリスハアベル症）を數へたが、主要な特徴ともいふべきは心理的緊張力の減退であつて、精神分析學者は之をヒステリイ、不安性ヒステリイ、強制神経病の三種に區別する。

ヒステリイの原因は、フロイドに従ふと、普通の欲求と性慾の抑制との間に於ける感情の衝突に在る。故にヒステリイは普通の心理と病的な心理との契點に位するのである。此の點から考へるとフロイドの説は普通の醫者の説に近い。普通にヒステリイは何か最近の出來事を發病の原因とするものだとはいふが、フロイドもヒステリイの原因には普通の欲求が關係するものと解釋する。但し最近の經驗なるものは過去に於ける感情の衝突の結果に過ぎないのであつて、それが最初の病症ではない。感情の衝突が鬱積すると、それが何等かの形で肉體的障礙に「變化」するのである。故にヒステリイを療治するには醫藥を

用ひたこともあるが、精神分析學者は其の根本原因たる心理的病症を除去することによつて之を治癒しようとする。但し生理的治療をも全然無視するのではない。フロイドの説によれば、ヒステリイには心理的原因もあれば生理的原因もある。ヒステリイの原因は心理的であるにしても、その病症は何等かの生理的弱點に向つて發するものである。

ヒステリイ患者には求愛、怨嗟、自責、後悔などの感情が過度に強くなるものであるが、その心理作用は夢に於けると同じ事で、慾望の不満が空想を生みその空想が默劇の形で描き出されるのである。さうして夢が現の検査官を憚るやうに、ヒステリイ患者の空想も現實との關係を顧慮して、空想を恣にするのを憚るから、その空想は夢の如く甚だ取り留めの無いものになる。

不安性ヒステリイは普通のヒステリイには伴ひ易いものであるが、此種の場合には單に生理的原因のみから起るのではない、やはり何等かの慾望の不滿か

ら起るのである。一體不安の感情は何故に起るかといふに、それは危険を撃退して自己を防衛する爲に起るのである。故に不安性の病症が存在するのは、その危険を撃退して自己を防衛するだけの力が残つて居るからであつて、若し其の力が微弱になると、不安性は始めて恐怖病になる。しかし恐怖病にならない前にも、多小は恐怖病の兆候を伴ふ。たとへば他の人と一緒にないといふ處を歩くのが恐ろしいとか、或は赤い物を恐れるとかいふやうなヒステリーがある。恐ろしい夢なども多くは不安性ヒステリーの結果で、不安性のヒステリー患者は大きな獣は追はれるとか、強盗に襲はれるとかいふやうな夢を見ることが多い。

ヒステリーは寧ろ女の病であるが、強制神経病は寧ろ男の病である。此の病の特徴は感情の分裂にある。自己の感情が左右に分裂して反對の方面に發動する。たとへば一人に對して愛と憎との感情が二重に働くのである。フロイド

の擧げた例に依ると、或る青年が路上の石に跌いて足の指を傷めた結果、不思議な強制觀念に囚はれた。それは自分と婚約した女が今日何處かへ逐電しようとするが、その女の乗つた一頭立の馬車は必ず停車場へ行く途中で此の石に躓く。故に青年は其の石を拾つて路傍へ捨てやうとしたが、何だか馬鹿々々しいやうな氣がして、その石を態と路の真中に置いた。

斯様に自分で悪いと思ふ事や厭だと思ふ事を無意識的に強制せられるのは、一は幼少時代に於ける行爲や習慣の結果であつて、殊に感情の抑制は後年に至つて此種の病症を誘發し易いものである。たとへば羞恥の感情の甚だしいのは、幼少の時代に人に見られて悪いやうな事をするとか、或は人が見はせぬかと恐れたりした經驗の結果であることがある。また意思や理性の薄弱な者は、物事に對して不安を抱く結果、その不安を慰藉する爲に、却つて不安なものを確信するやうな心理状態に移つて行く。たとへば死を恐れ死後の事を不安に感

ずる者は死後の生存とか靈魂の不滅とかいふやうなことを信じたがる。不安が却つて信仰となるが如きも、亦た感情の分裂であつて、迷信と強制神経病との間には特殊の關係がある。

七といふ數を有難がつたり、十三といふ數を嫌つたりするのは、強制神経病の一種である。ヨハネの「黙示録」には七の星だとか、七の燈臺だとか、七の封印だとか、七人の天使だとか、七の角笛だとか、七頭の龍だとか、七の靈だとか、七の教會だと書いてあるが、マツケンドロイの擧げた例にも、或る患者は何事を爲すにも七度づゝ繰返す癖で、朝起きるにも夜寝るにも七度づゝ臥床に出没する、一杯の珈琲を注ぐにも七度に割つて注ぐ、ナイフでもホークでもスプンでも一口に付いて七度づゝ上下する。しかし文明の人士でも随分七といふ數字には拘泥して居る。一週間を七日とし、一箇月を七日の四倍として居る、三七二十一歳を丁年として居る。ワイルドのサロメは薄絹を七枚重ねて居る、三七二十一歳を丁年として居る。ワイルドのサロメは薄絹を七枚重ねて居る。

る。

強制神経症は好奇心を強くするものであるが、これも不安の念が昂じて不確實な物事の確實性を迷信する結果で、常人が考へると到底あり得べからざることとが、患者には有り得る如く見えるのである。故に此種の患者には往々にして他人の死を信ずるやうな心理が起る。有名な人や親しい人が何だか死ぬやうな氣がする。また此の病氣は原因と結果との關係を轉倒したり甲の原因と乙の原因とを取違へたりする。或る賣笑婦がフリンクの許へ来て「私は喫煙の結果死にます」といふから、「それは喫煙の結果ではない、梅毒の結果だ」と告げても、女は自分が賣笑婦であることすら信じないで、ひたすら煙草の爲に體が弱るのだと信じ、毎日七本以上の巻煙は吸はなかつた。

神経病者が不具になるのは一種の自衛作用とも見られる。たとへばヒステリ患者が聲や盲になるのは、音響や光線に餘りに敏感であるから、之を遮る爲

に聴覺や視覺が戸を閉ぢるのである。

三 癲 癇

癲癇といふのも甚だ内容の曖昧な病名であるが、要するに腦髓の病的情態の昂進した結果を總稱するのであつて、その病症にはヒステリイに類するものと精神病に類するものとがあるから、精神病と精神病との中間は位すべきものであらう。フエレンチの説に、癲癇は之を生理的なものと心理的なものとに區別するのは困難であるが、しかし茲に注目すべきことには、癲癇病者は人の知る如く異常に神経過敏な者であるのに、彼等は一般に柔和で怒ることが稀である。これは其の異常な舉動によつて自ら其の鬱を晴らす故であらう。「ぢだんだ」を踏んだり拳を掴んだり齒を食ひしばつたりするのは、見る目も恐ろしいが、それは感情の誇張によつて自ら慰めるからで、常人では左程までに深刻な

感情ではないのである。

ドストイエフスキイが十七歳の時に兄のミカエルに送つた手紙に、「私は苦しくてやり切れませんが、しかし良い考へが一つあります、狂になつたら良からうと思ふのです。」果して彼は癲癇に罹つた。彼の小説の中には屢々癲癇病者が出て来るが、その病人が癲癇の發作に襲はれた時の描寫は筆が神に入つて居るのを見ても、ドストイエフスキイが癲癇で如何に深刻に現在の不満を慰藉せられたかを察し得る。

四 精 神 病

神経病と精神病との區別は如何といふに、アドレルの説によれば、病症の根柢に欲求の不満が伏在するのは兩者同一であるが、その不満を満たす爲に代償を求めに當つて、兩者は其の方向を異にする。神経病者は現實から遠離して

空想の世界に入らうとするのであるから、無意識的には現實に不満であつても、意識的には現實に未練を残すまいとする、故に現實との衝突は比較的少ないのであるが、精神病者は空想が昂じて、自分が已に其の世界を實現して居る者の如く信ずるから、その世界と現實との不一致に對しては不満を感じずる。即ち神経病者が憂鬱であるのは、意識的には、欲望の満足や慰藉が現實的に得られないからでもなく、自身がシイザアやナポレオンでないからでもない。しかるに精神病者が憤慨するのは、自分がシイザアやナポレオンであるのに、周囲の者が之を認めないからである。

改め ↓ 防衛

フロイドの分類に従へば、精神病には勝利の精神病と防衛の精神病との二種があつて、前者は無意識が意識を絶對的に壓倒した結果で、たとへば少女が戀人を待ち焦がれて居る間に、その戀人と同棲する情態などを空想し、その空想が昂じて行くと、遂には無意識的空想が常識を壓倒して、少女を發狂せしめる

のである。また後者はヒステリーに似て周囲を厭惡し自己を防禦するのであるが、ヒステリーとは趣を異にし、渴望が自己以外のものとの交渉を絶つてしまつて、専ら内部的に自己を防禦しようとする。さうして遂には自己を優秀なものと考え、空想が昂じて誇大妄想狂となるのである。

尙ほ精神病の分析學的研究として注目すべきことは多いが、餘りに専門的に互るから、以上の説明に留め、性慾倒錯の研究に移るとしよう。

第十二章 變態性慾の研究

一 兩性愛

同性愛の變態で兩性愛とも稱すべきものがある。これは一人で男女双方を戀愛するので、即ち同性と異性とを兩つながら戀愛するのであるが、此種のもものは心理的に第三性又は中間性を代表するもので、生理的に兩性の生殖器を具へた者と對應するのであらう。禽獸には兩性愛の傾向を有するものが少くないが、人類の社會でも古代には兩性愛の是認せられた例がある。ギリシヤの時代にはゾオクラテエスやプラトオンやアルキピアデスなどの如き聖賢ですらも女色と共に男色を愛したのであつて、當時男色が如何に流行したかはプラトオンの對話

篇中今日では削除せられて居る部分及び當時の學制を見ても分る。古代どころか、中世又は近代に於ても男色は各國に行はれた。日本では西鶴の謂はゆる若道が即ちそれである。しかし、茲に注意すべきことには、男色は必ずしも同性愛ではない。男が美少年を愛するのは、之を男性として愛するよりも、寧ろ男性に於ける女性を愛するのであつて、美麗な少年の内氣で柔和な容貌や態度や皮膚は男子よりも寧ろ女子に近い。故に其の少年が相當の青年になると、もはや戀愛の對象ではなくなる。

何故ギリシアでは男色が殊に露骨に行はれたかを想像するに、古代のギリシアは婦人は餘り外出しないで、子女と共に専ら家庭を守つた、さうして男子は家事を婦人に任せて外に活動した。故に小兒は男子よりも婦人の感化を受けることが遙に大であつたから、少年は之が爲に著しく女性化せられ、男子の性慾の對象となつたのであらう。しかし此の想像は餘り的確だとは言はれない。

何故かといふに、男の兒が冷い父と熱い母とに育てられると、今日の實際では兩性愛にはならないで同性愛に陥るのが、寧ろ普通だからである。故に兩性愛の原因は之を他日の研究に委ねて、次には同性愛を説明しよう。

二 同性愛

父でも母でも片親が餘りに子供を鍾愛するのは、子供の爲に却つて重大な不幸の原因となるから、兩親が双方から適當に我子愛を愛せねばならぬことは、前にも一言した如くである。父母が子女の愛に溺れると、子女も父母の愛に溺れてしまつて、自分自身を適當に造り上げる時機を逸してしまふ。父母の愛の羈を脱して自己を自由に解放するのは、小兒としては肉體的にも精神的にも相當の努力を要することであるが、しかしながら其の努力は成人の後に至つて適當に報償せられる。

勿論父母の愛は子女には絶對的に必要であつて、幼稚な時代に孤兒院などに入れられた小兒は理性も意思も感情も健全を失つて貧弱なものになる。如何なる天稟も冷い環境の爲に大抵は固渇してしまふ。故に幼少時代には母親を讚美する程に母親に愛撫せられる必要がある。けれども、若し其の愛が偏頗である、小兒をして性的關係を轉倒せしめる虞があるから、世の父母たる者は謂はゆる舐積の愛に溺れぬやうに注意しなければならぬ。

性的關係の倒錯には受動的なものと能動的なものとがあつて、フェレンチは之を客觀的同性愛及び主觀的同性愛と名づけた。

男子の受動的同性愛は性慾轉倒であつて、此種の男子は他の男子に對して自己を婦人だと思ふ。此の關係は性交に於ても日常普通の行動にも存在し、此種の男子は全く婦人と同一である。之に反して能動的同性愛の男子は性そのものを轉倒して居るのではない。寧ろ普通の男子よりも遙に男性的ある、さうして

其の精神は慄悍で容貌は粗剛である。受動的同性愛の男子は自分よりも有力な男子を戀愛するが、しかし全然女子を厭ふのではない、女子とも親密に交際するが、それは異性として親しむのではない、宛も婦人と婦人とが親しくするやうに、同性として親しむのである。之に反して能動的同性愛の男子は一般に美少年を愛し、女子を卑しむ傾きがある。また受動的男子は戀愛に狂熱するやうなことはない。フロイドの説によると、これは男子の場合の特色で、此種の男子は有力な男子の愛を受けろのを欣び、その肉體を讚美するまでのこととて、熱烈に戀するのではない。之に反して能動的男子は同性との戀愛に熱狂し、而も屢々相手を代へる。兩者は孰れも性格の破産に悩むのであるが、殊に後者はその情熱が満足を得難い爲に精神病に陥り易い。さうして此の兩者は概ね幼少時代の環境の無意識的犠牲である。

受動的同性愛の多數は幼少時代に寡婦に育てられた者である。父親が無くて

母親だけに育てられると、母と子との間に毫も嫉妬が起らない。父と母とが居れば、子は時に父に對して嫉妬を起すのであるが、母を専有する子には其様な機會が稀である。故に此種の少年は男性と競争する必要を知らず、ひたすらに母親を模倣するから、男子に對しても女子に對してもその態度は専ら女性的になる、母親が男女に對すると同一の心理を以て男女に對するのであるから、その母親が同性愛の患者でない限りは、男性の心理を以て女性を愛することを習はない。若し母親に色男でもあつて他の婦人と競争でもすると、少年は益々同性愛の傾向を深め、同性を戀ふる異性を嫉妬するが如き變態に陥る。かくの如き悲劇を救ふ唯一の方法は最愛の母親をして同性愛に陥らしめる事であるといふに至つては、ますます悲惨だと言はざるを得ぬ。

しからば其の寡婦が亡き夫を慕ふことが深かつたら如何といふに、その結果は一層悪い。少年は之が爲に益々男を戀ふるの情を煽られる。

精神分析學で研究した結果では、受動的同性愛には右の外に更に他の原因がある。男の兒の中には生來女性的で女の兒の様な容貌をして居るのがあつて、かういふのは動もすれば兩親などから女の兒扱ひにせられ、女性的な服装などをさせられる。その結果此種の男の兒は、やはり母親を模倣して父親の異性的鐘愛を受けることに腐心する。また生來女性的な男の子でなくても、その家庭で父親が振はないで母親が威張ると、少年は母親を模倣するやうになる。之と同じ理で、父親が優越で母親が貧弱な家庭の女兒も性慾を錯誤する虞れがある。右の如き事實に顧みると、人間の性格は先天的に生まれるよりも寧ろ後天的に造られるのであつて、殊に幼少時代の境遇に陶冶せられる所が多い。而も單に精神的性格が然るのみでない。その性格の結果として肉體的特質にも重大な影響を來すのである、小兒は歩くことも食ふことも語ることも模倣によつて會得するのであるが、考へることや恐れることや愛することや憎むことをも、や

はり模倣によつて覺えるのであらう。子の性癖が親に似るのは遺傳よりも寧ろ模倣の結果であるとすれば、小兒の性格の大部分は後天的に父又は母によつて定められるのである。吾々は單に此の意味に於ても一言一行一舉一動に細心の注意を拂はねばならぬ。

次に能動的同性愛は受動的同性愛と發生の原因を異にする。此種の性慾錯誤は早熟な兒童に起り易い。性的な事に早熟な兒童は性的な事に好奇心を抱くことが大であるが、父母などが之に關する知識を與へることを拒むと、兒童は好奇心を慰める爲に色情や出産に關して種々の想像を逞しうする。その結果は往々にして肛門玩弄や汚物玩弄の悪習に陥り、或は母親又は女兒の陰部に注目するやうな性癖を生ずるのであるが、此くの如き場合には、大抵は父母又は其他の者から嚴しく咎められる。茲に於て男の兒は異性に對する興味を抑へ、一轉して同性との不自然な愛によつて其の不満を慰めるやうになる。此種の少年

は青春時代に一時は健全な異性愛に復歸しようとすることもあるが、少しでも之に故障を感じると、忽ち之に失望して、再び同性愛に陥つてしまふ。故に能動的同性愛は二重の意味に於て病的な慰藉である。第一、少年は子供の癖に色欲などを起してはならぬと父親に叱られて異性愛を斷念するが、之と同時に折角の楽しみを奪はれて之が爲に一種のマソキズムに囚はれ、そのマソキズムに一種の慰藉を發見する。第二、不自然な性欲の遂行は往々にしてサアデズムに陥り易いもので、即ち父親に對する復讐の代りに他の異性に殘虐を加へるのである。

三 手淫と無淫

話が不潔になるが、忍んで聞いて貰はねばならぬ。何となれば、後に叙べる如く、少年や少女の手淫は必ずしも病的な現象ではなく、健全な兒童には必

ず起るべきもので、それが起らない兒童は性慾に缺陷があるから成人して後には性交不能に陥り易い。

一定の年齢に達すると、兒童は一種の成人欲に驅られる。その結果成人の情事を模倣する爲に手淫を行ふに至るのであるが、一定の年齢を経過すると、現實的に漸次成人の領分に接近して活動の天地が擴張せられるから、手淫によつて欲求の不満を慰めるやうな必要が無くなる。故に次第に之を廢する。若し一定の年齢を経過しても尙ほ且つ之を改めないならば、それは其の境遇が不良で成人としての満足を得るに困難な事情が存在するからであらう。此種の手淫は勿論病的である。ホワイトの説によれば、手淫は一種の萬能慾であつて、自分を満足せしめる自己満足の種類である。兒童は一定の年齢に達すると一種の自贊心から自己の肉體を讚美する心理を生ずる。此の心理が關係して自己満足的萬能慾となるのであらう。しかし一定の年齢を経過すると、此種の自贊心は無

くなるのである。一定の年齢を経過しても尙ほ自瀆の習慣を棄て得ないのは、此の自費心の爲ではない。精神上又は肉體上或は境遇上に何等かの缺陷が有るからである。たとへば内氣で意思の弱い者は手淫の悪癖を改め難い。これは手淫を行つて精力を漏らさぬと色情の爲に失敗する虞の有ることを無意識的に危ぶむからである。即ち一種の安全慾が病的に發動するのである。精力の異常に旺盛な者が手淫を行ふのも亦た然りなのであらう。また處世上の失敗者などには手淫病者が多い。神経病者も多くは手淫を行ふ者である。これは現實に不満な者が酒の力で鬱を散ずると同じ事で、即ち病的の慰藉である。ユンクの擧げた例によると、或る婦人は愛子を亡つた結果として手淫の悪癖に陥つた。

手淫の結果としては、婦人はヒステリイを起したり氣が荒くなつたりするが、男子は性交不能や精水早漏に陥り易い。手淫の爲に性交不能となるのは、單に生理的に精力を減退した結果のみではない、更に心理的方面に於ても、性

交の空想に馴らされた結果、早漏症に陥ることもあり、また手淫で十分の満足が得られなかつた経験から、心理的に性交の興味を冷却せられて、不能に陥ることもある。また婦人が如何に美人であつても、情事に餘りに冷淡であると、男子をして不能症に陥らしめる。

しかし性交の不能は手淫のみが原因ではない、寧ろ多くは幼少時代の記憶に原因するのである。性交の不能は心理的神経病の證據であつて、幼時に色欲を迫害せられた経験の無意識的記憶が性交を不能ならしめるのである、たとへば少年の時代に母親や姉妹に向つて性慾を起した者は、成人して結婚すると、自分の妻が母親か姉妹の如く感ぜられて、性交の不能に苦しむことがある。また幼少時代に少女に向つて猥褻な行爲をなし、厳しく咎められたことのある者も此の病に罹り易い。

四 サアデズム

性慾の病的な玩弄には、手淫の外に、生殖器暴露狂といつて、自己の身體や陰部を人前に暴露して快を貪るものや、また生殖器好奇症といつて、他人の陰部を眺めて快を貪るものもあるが、茲にはサアデズムとマソキズムとの事を叙べよう。

サアデズムは、前にも一言した如く、フランスの變態性慾病者サアド侯爵の名から取つた病名で、他人又は性慾の相手を酷遇することによつて快を取る病である、此の病は男子又は能動的同性愛の婦人に多い。これは性的關係に於て能動的な地位に在る者に多い病だからで、サアデズムの患者は性慾の相手を虐待することによつて男性的優越感を満足せしめるのである。

此の病は如何にして起るかといふに、やはり強度の性慾抑壓に原因することが多い。即ち性慾を苛酷に虐待した經驗が、性慾を満足せしめる際に至つて、苛酷な殘虐となつて發動するのである。風俗取締の役人などが、猥褻な文書の檢閲や禁止を行つて居る間に、知らず識らず一種のサアデズムに陥ることがある。吾々から見ると猥褻でも何でも無い小説や繪畫を官憲が禁壓するのは、官憲の心理が吾々の心理よりも猥褻になつて居る故であることも無いではないからう。

サアデズムの患者は、丁度癲癩病者と同じやうに、その異常な行爲によつてその、不満に對する多大な慰藉を得る者である。一般に神經病者は正直で道德的な好人物であるが、サアデズムも亦た平生は寧ろ善良な人物である。性慾に於て殘虐を行ふのも主として無意識的作用である。中世の隱者は善良な人物で、おまけに肉慾を殺す事に精進努力したのであるが、それでも時々惡魔の誘惑を受けたといふが、その惡魔なるものは實は殺された肉慾の怨靈に外ならぬ。

い。聖アントニオの如き偉大な聖者でさへも、恐ろしい誘惑に逢ひ、同性相姦や人獸相姦の妄想に惱められたのである。

五 マソキズム

マソキズムといふのも、前に叙べた如く、變態性慾のことを書いたザツヒエル・マソツホの名を病名に採つたので、サアデズムとは反對に、他人から暴虐を加へられて快を取るといふ病である。此の病は如何にして起るか。フロイド派の説によれば、これも幼少時代に於て性交を誤解した結果であつて、小兒は母親が性交に際して苦痛を感ずるものと想像する。その想像が記憶に深い印象を與へると、成長して後に自身が性交に際して苦痛に快を求めるやうな心理を發生せしめるのである。

右の外に、フェチズムと云つて、陰部又は陰部を象徴した物を見たり觸れたりして快を貪る病もあるが、異性の毛髪や趾に觸れて悦ぶのも亦た此の種の病である。またネクロフィリアといつて、死體を姦淫する病もある。これは異性を恐れることの甚だしい者に多い。女を殺して後に姦する男は餘程内氣な臆病者であらう。獸類を姦するのも大體に於て之と同じ心理の結果である。

フロイドは神経病は變態性慾の消極的なものだと言つたが、これは面白い言である。神経病は欲求の抑壓から起るのであるが、變態性慾は之に反し欲求の病的發作から起る。此の相異を最も良く説明するのはブリルの擧げた實例である。數年前に一人の患者が大變に重大な眼病だからとて療治を求めた。これらで方々の眼科醫者に掛かつたが、結局神経に異状があるとの宣告を受けたといふのである。しきりに盲に成るのではないかと心配して居たが、療治の結果、二年程前から全快してしまつた。彼の神経病は變態性慾の消極で、眼病の全快するまでは、常に神経病と變態性慾との中間に彷徨して居た。一日中何をして

居るかといふと、他人の陰部を漁るか、他人が陰部を露出した情態を空想するか。或は自分が盲になることを心配するかである。即ち彼の欲求の一部が發作して變態性慾となり、陰部好奇症に陥つたのであるが、若しも盲になると此の欲求を充たし得ぬと感じたから、盲になるのを虞るといふ不安性神經病に罹つたのである。故に變態性慾は欲求の一部が發動する結果であり、神經病は欲求が發動し得ぬ結果である。即ち神經病は變態性慾の消極的なものである。

第十三章 犯罪心理の研究

一 犯罪と疾病

今日までのところでは、分析學者の犯罪及び刑罰に關する研究も、犯罪學者の分析學的研究も餘り著しい發達を見るに至らないが、從來の精神病學で監獄や工場などに於ける犯罪人や勞働者の心理情態を研究した結果を資料にして考案しても、犯罪と精神的缺陷との間に密接な關係の有ることは明かであつて、これは謂はゆる常習犯にも突發的犯罪に於ても共通の現象である。しかるに今日の法廷では、特殊の犯罪でない限りは、一々犯罪を審判するのに醫者の鑑定を求めない。法律學校などでは精神病學の講座を設けたら、判事や檢事の參

考になることが多いであらうが、今日では其の設備が甚だ不十分である

今日犯罪の多數を占めるものは財産に關する犯罪であるから、此點から考へても、大抵の犯罪は我慾の病的發動だと想像せられる、人間は我慾を發揮する爲に實力を要求する者であるが、今日の社會では實力を象徴するものは主として金銀乃至財産である。金さへあれば、どんなことでも出来る、金ほど有り難いものは無い、と趣味や教養の低い者は考へる。さうして趣味や教養の高い者ならば、假令財産に乏しくても、空想の力によつて之を慰藉すべき途を持つて居るのであるが、趣味や教養の低级な者は、その途を知らないから、直接に財産を所有しなくては満足しない。また此種の人間は、やはり想像力の貧弱の爲に、犯罪の結果が如何に恐るべく忌むべきであるかを充分に想像しない。そこで眼前の欲望に駆られて詐僞や窃盜を働いたのである。

財産に關する犯罪に比較すると、性慾に關する犯罪は餘り多くない。フロイ

ド派に言はせると、詐僞や窃盜を働いた者は其の金を大抵は女色に盡すのであるから、財産に關する犯罪も實は性慾の結果かも知れない。しかしアドレル派に言はせたら、その性慾を充たす爲に詐僞だとか窃盜だとかいふやうな事を敢てするのは、寧ろ我慾の結果ではないか。とにかく大抵の犯人は、精神上又は肉體上或は其の双方に、何等かの缺陷を持つて居る爲に、尋常普通の手段では我慾を充たすことが出来ない、又は出来ないと考へる。宛も意思や理性の弱い者が病的になるやうに、最初又は中途から成功を危ぶんで失敗を豫期する。將來が不安で不確實だと、その將來を待たないで、非常手段に訴へて無理にも目的を遂げようとする。茲に於て、單に其の目的を遂行した結果のみならず、その目的を強行する非常手段に對しても、一種異常な興味を覚え、二重の慰藉を得るに至る。犯人の矯正が困難なのは一は之が爲であつて、單に正當な手段で目的を達し得るやうにしてやつたのみでは、犯人は一半の慰藉をしか得ないの

であるから、また何となく物足りなさを感ずるのである。詐偽師や窃盜犯が仲間に向つて腕自慢なぞするのも、亦た此の心理に基づくのであらう。

以前には犯罪が階級的だとか遺傳的だとかいふやうな學說も行はれたが、今日の犯罪學者は全然此種の學說に耳を借さなくなつた。現にスバウルデング及びヒイリイの兩氏は、千人の犯人に就いて之を調査した結果、此種の學說は「無根據な形而上學的臆說」であると斷定した。またシユテエケルの說によれば、凡ての神經病者は犯罪人の素質を有する。此點から考へても、犯罪が病的であることが察せられるが、前述の如く病的現象は先天的であるよりも寧ろ後天的なものであるから、犯罪の原因も亦た階級的乃至遺傳的ではなく、寧ろ後天的な病的現象であると考へざるを得ない。

しかし神經病と犯罪との間には反對の關係も存在することをも考へなくてはならぬ。前述の如く神經病者や精神病者や精神病者は概ね善良で正直で道徳的な好人物で

ある。強制的神經病はサアデズムに向ひ易いものであるが、患者は之を抑制して道徳的な方面に向けることも多い。肉食を避けるとか、禽獸を愛護するとか、慈善を行ふとか、さういふやうな事によつて慰藉を得ようとする傾向がある。一般に神經病者は、無意識的暴君にはなるが、犯罪人にはならない。我儘にはなるが、不徳にはならない。これは何故かといふに、神經病者は病的ながらも想像力に富んで居るから、寧ろ常人以上に犯罪の結果の恐るべきことを明白に想像して、犯罪を回避するからであらう。唯だ其の想像が病的であつて、空想と現實とが一致を缺くが爲に、短慮になつたり我儘になつたりするに過ぎない。また神經病者は現實に對する未練が淡いのであるが、普通の犯人は之に反し、想像力は貧弱で、現實への執着は強い。故に其の執着が想像を凌駕する時には、前後を忘れて罪を犯すのである。病人は道徳心が強くて悪人に道徳心の乏しいのは此の想像力の大小に由る所が多い。

二 犯罪と刑罰

曾てアメリカのインディアナ州の監獄で調査した結果に依ると、百人の犯人の中で、十二名は精神異状、二十三名は精神薄弱。三十八名は身體虛弱、十七名は腦病、十名は癲癇であつた。即ち犯人の九割は精神的乃至肉體的に不完全な人間である。しかるに之等の人間が法廷では如何に取扱はれるかといふに、病人として取扱はれるのは寧ろ例外の場合に過ぎない。これは主として犯人自身が病人とは自覺せずして言語も動作も常人の如く装ふのが普通だからであるが、その實は自己に缺陷の有る病人が其の弱點を隠蔽しようとするのと同じの心理に基くのであらう。尤も犯罪人の道徳心の乏しいのも其の一因で、犯人は常人の思ふほどには自身を悪人と思つては居ないから、案外平氣なものであらう、しかし吾々は之を其の儘に放任して置くべきではない。子女の教育や病人

の治癒に從來とは異なつた注意を拂はねばならぬのと同じ理で、犯人にも相當な同情を寄せ、彼等の無意識的過失を救ふやうにしなくてはならない。

前述の如く犯罪は病的な慰藉の一種であるから、その原因は病的でなくてはならない。しかるに其の病的な原因に注意を拂はないで、徒に其の慰藉を嚴罰するに於ては、單に其の原因を除去し得ないのみではない、益々慰藉の必要を痛切ならしめる虞れがある。ロンガアドの「犯罪人と精神病」に依れば、犯人が精神病に陥るのは獄中に於ける待遇の苛酷が最大の原因であつて、犯人は現實の生活に於ける自由を略奪せられた結果、その慰藉を妄想に求め精神病に罹るのである。發音や談話を嚴禁せられた犯人が聽覺妄想症に罹るのも同一の心理の結果であつて、現實的に耳を娛しませることが足りないから、妄想的に耳を樂しませる所の病を求めるのである。

リウデインの著書「囚人生活に於ける精神的疾患の臨床的形式」によれば、

囚人は有意識的乃至無意識的に絶えず良心の苛責と争ふ者であつて、之が爲に其の精神又は肉體に病的な痲痺を生じ、良心を遲鈍ならしめると同時に、精神的疾患によつて種々の妄想を起し、その妄想によつて自己を辯護し、自分は悪人ではないのに不法に迫害せられて居る者と迷信するやうになる。これは殺人犯人に於てすら然りといふのであるから、まして輕罪の犯人には一層有り勝な事であらう。さらぬだに病人は常人以上に病的な慰藉を渴望する者であるのに、それが囚人の身となれば、その傾向は一層著しきを加へざるを得ぬ。さうしてそれが極端に走ると、自分の罪を忘れて自身を善人と思ふやうになる。さうなつては之を改悛せしめることは甚だ困難であるが、刑罰が苛酷であるほど、益々此の弊を大ならしめるのであるから、犯人を取扱ふ人々は此の點に思ひを致さなくてはならない。

囚人の精神的疾患を研究すると、獄中生活は精神的にも肉體的にも益々人間

を不良ならしめるのみで、犯人を處理するに必要なのは監獄よりも教育だとさへ言はれる。思ふに古來精神病者の多數は罪人として待遇せられ監獄や遠島に送られたのであるが、今後は百年を出でずして一切の犯人は病院から學校へ送られることになるかも知れない。

第十四章 精神分析の方法

一 應用の範圍

精神作用又は心理作用と直接の關係を有する疾患は甚だ多い。たとへば喘息や吃音や鼻呼吸困難や咽喉痛の如きすら此の部類に屬するのであるが、精神分析學的方法で之等の疾患を悉く扱ひ得るやは疑問である。且つ精神分析學は謂はゆる精神療法や心靈療法とは異り、敢て普通の醫術を無用視するが如き傾向は持たない。唯だ普通の醫術では療し得ぬ疾患に對して治療を試みるまでのことで、普通の醫術で治し得る病にまでも手を出して醫者の領分を蠶食するのではない。また分析學では精神病をも癒した例も有るが、しかし主として神經

病の治療に努力する。更に神經病者でも老人や小兒には應用せられない。老人は精神が硬化して居て可塑性に乏しいからであり、小兒は精神が未定で集中性を缺くからである。白痴や精神病者もいけない。同性愛病者やヒステリー少女などは分析學者は取扱ひたがるが、これも禁物である。此方の分析學者から向うの分析學者へと渡つて歩く様な浮氣な患者も駄目である。甚だしいのになると、亭主に不満な細君が情夫を作つた申譯や妻に不満な夫が春を買ふ口實を得る爲に分析學者を訪れるのであるが、こんなのも斷はらなくてはならない。結局適當な患者は如何といふに、相當の教養及び知識を有し、性格が眞面目で、餘り老人でも幼少でもなくて、分析學者の言を善く理會して、自己の性格に多少の異常の有るのを認め、分析學者の忠告を熱心に求める者でなくてはならない。

分析學者は醫者でなくてはならぬかといふと、さうとは限らない。スキデン

のビエルは斯學の大家であるが、其の説に依れば、普通の醫者は物質的な方面の教育ばかりを受けて居るから、精神分析學者たるには充分だと言はれない。故に醫者が必ずしも分析學者に適するとは限らない。素人で分析學者になつたブイステルの如きは、醫學の素養が無くても格別困難を感じないと言つて居る。

分析學的療法には普通の醫術よりも多くの時間を要する。醫者は一時間に三人乃至六人の患者を取扱ふが、分析學者は一人に一時間を費さなくてはならぬ。これは善く患者の心理を看察するを要するのみならず、看察の結果を暗記しないで一々記録しなければならぬからである。(暗記は錯誤を生じ易い。)

二 分析の方法

分析學的方法を施すには、その著手が最も肝腎であつて、患者が治療を求め

に來た時に最初に發する言葉こそ診察の鍵なのである。その病氣が癒るか否かは最初の印象で大抵は見當が附く。さうして先づ其の患者の性格を一見して、此の患者は教養が高くて金錢には淡泊だと見たら、一應患者をして病氣の由來を物語らせ、然る後數時間勝手な空想に耽らせる、しかし普通の患者だと、こんな悠長な方法では、まだるつこいばかりでなく、療治代も高からうなぞと思ふから、唯患者の告白を聴くだけにする。大抵の患者は多少の虚偽を交へる者であるが、術者が之を疑ふやうな色を示すと、患者は反感を起して素直でなくなる虞れがあるから、本當に欺かれたやうな顔をして聞かなくてはならない。患者の方では何だ此の學者は、おれがこんなウソを言つても、それをウソとは知らないのか、そんなことで分析が出来るか、なぞと思ふかも知れぬが、安んぞ知らん、實は夫子自身乃公自身が欺かれて居るとは。かうして一時間程しやべらせたら、次には成るべく敏速に其の告白の反應を

看取しなくてはならない。さうして其の反應によつて患者の心理や發病の原因を精確に道破しきへすれば、患者は驚いて「此の人は馬鹿にならぬ」と思ひ其後は術者に柔順になる。

術者によつては、患者を横臥冥目させ、心の中で一から百までの数を數へさせ、さて其の後に左の如き刺戟語表の文字を一々順次に朗讀して、之に對して患者の心に最初に思ひ浮ぶ事を一々卒直に告白せしめる。(左記はチュウリヒ派の選定した刺戟語表である。)

- (1) 頭
- (2) 縁
- (3) 水
- (4) 歌ふ
- (5) 死
- (6) 長い
- (7) 舟
- (8) 拂ふ
- (9) 窓
- (10) 親
- (11) 料理
- (12) 問ふ
- (13) 冷
- (14) 幹
- (15) 踊る

- (16) 村
- (17) 湖
- (18) 病氣
- (19) 誇り
- (20) 卓
- (21) インキ
- (22) 怒
- (23) 針
- (24) 遊ぶ
- (25) 航海
- (26) 紺
- (27) ラムプ
- (28) 犯す
- (29) パン
- (30) 富
- (31) 木
- (32) 突
- (33) 愛らしい
- (34) 黄
- (35) 山
- (36) 死ぬ
- (37) 鹽
- (38) 新らしい
- (39) 習慣
- (40) 斬る
- (41) 金銀
- (42) 馬鹿げた
- (43) バムフレット
- (44) 嫌
- (45) 指
- (46) 高價
- (47) 鳥
- (48) 落ちる
- (49) 本
- (50) 不正
- (51) 蛙

- (52) 分ける
- (55) 子供
- (58) 怨しむ
- (61) 家
- (64) 争ふ
- (67) ニンジン
- (70) 老
- (73) 箱
- (76) 洗ふ
- (79) 無い
- (82) 狭い
- (85) 愛
- (53) 飢
- (56) 注意する
- (59) 梅
- (62) 好きな
- (65) 毛皮
- (68) 繪がく
- (71) 花
- (74) 野
- (77) 牛
- (80) 虚言
- (83) 兄弟
- (86) 偽りの
- (54) 白
- (57) 鉛筆
- (60) 結婚
- (63) ガラス
- (66) 大きな
- (69) オルガン
- (72) 打つ
- (75) 家族
- (78) 友人
- (81) 行ひ
- (84) 恐れる
- (87) 心配

- (88) キスする
- (91) 戸
- (94) 満足
- (97) 口
- (100) 浪費
- (89) 嫁
- (92) 選ぶ
- (95) 嘲弄
- (98) 美しい
- (90) 純粹
- (93) 秣
- (96) 眠る
- (99) 女

之等の刺戟語に對しては、絶對的に健全な者ならば、必ず三秒間位で各語に何等かの反應を起すのであるが、患者には多小の遲速がある。患者の常として或る語を特に幾回も繰返す者であるが、これは一種の自欺作用であつて、患者は實は其の語を好むのではなくて嫌ふのである。従つて其の語から起る反應は告白を憚るところから、告白を躊躇して其語を繰返すのである。また語の意味を誤つたり「何ですか」などと尋ねたら、その語も不快なのに相違ない。「キス」と言はれて赤面するのは最近に接吻などを經驗した證據である。若し夫れ

患者が或る語を發して、思はず目を開いて、また閉ぢるといふやうなことがあつたら、それこそ分析の急處であつて、患者が目を開くのは術者に如何なる印象を與へたかを見る爲である。また或る語に對する反應が著しく長い時間を要するのは「交錯」の證據である、一箇の刺戟語に對して數箇の反應語を發するのは患者の薄弱感を告白する所以であり、數箇の刺戟語に同一の反應語を發するのは脅迫性神經病の兆候である。(ユンクの擧げた例に依ると、或る患者は數種の刺戟語に對して「低い」といふ反應語を發したが、此の男は身長短小な爲に惱んだのであつた。)刺戟語に對して反應語の代りに「定義」を與へる患者がある。「梅」といふと「菓物」などと答へる。これは知力の薄弱な結果で、自己の無知を暴露することを虞るところから、知つたかぶりに、定義などを與へるのである。「パン、好きです」「緑、嫌ひです」などと好き嫌ひを言ふのは我々の強い者である。人格の分裂を來して居る患者は、「白、黒」、「長い、短い」な

ぞと、反應語の代りに反對語を發する。

右の如くして得た反應語の表を作り、或は更に他の刺戟語表によつて重ねて試験して、患者の心理の重心が何處に在るかを研究すると、之によつて精神の分析が行はれる。左に其の例を三つ示す。

〔一〕 首……首……木……池……頭……痛……水に落ちるやうな氣……盲……

工場……父親が其處へ出て居ました……子供と遊んで……さうです……子供が私の上に落ちました……私は七つ位でした……私の首がいざつて居ました、皆が工場から父親を呼んで來ましたら、父親が私を醫者へ連れて……

〔二〕 蛙……厭……何も考へられません……これでおしまひ……厭……生殖器……憎……ねばるもの……蛇のやうな氣持……子供の時分に蛙に觸ると死が出來ると言はれました……その時分に……手淫を叱られました。

〔三〕 死ぬ……恐れる……蛆……死ぬのが恐ろしかった……死んだ人を見る

のが嫌ひ……或る娘のことを思つて居ます……皆が死んだ他の娘を見舞ひに行きました……絹の衣物……私がそれを上げると皆が娘の顔を見ました……私は娘の冷い顔を撫で、見ました……咳いてビツクリしました……斯うして反應語の連絡によつて病因を探り得るのであるが、之を見ても病因が幼少時代に存在することが想像せられるであらう。第二の例に於ける如く、何も考へないことか、これでおしまい」とか或は「忘れました」とか「たと思ひます」とか、曖昧なことを言つたら、隠し立をするのは、故意でなくて無意識的であるが、そこに重大な原因は潜んで居る、さうして他の刺戟語によつて其の秘密は發かれる。故に術者は強制的に告白せしめるには及ばない、唯だ之に特別の注意を拂へばよいのである。犯罪を査問するにも願はくば此種の方法を應用したいものである。

三 夢占の利用

分析の第二の方法は夢占の利用であつて、夢には新舊の欲求の不満の交錯が少くない。夢の分析學的解釋に已に叙べた如くであるが、夢を分析するに就いては、左の如きアドレルの格言がある。

- 一、夢は心理情態の寫生的反映であつて、分析者は之によつて當人が何等かの問題を解釋する態度の特徴を考察し得る。
- 一、夢は恐怖の昂奮及び勢力の昂奮に基く過去の記憶を幻覺的に喚起して記憶の復活を來すものである。
- 一、夢は、「かの如き」といふやうな、生活の象徴と解しなくては意味を爲さない。
- 一、内容の同一な夢を繰返して幾度も見るのは、その夢が無意識的中心思想

に基くからである。それが幾つもの夢になるのは問題の解決に種々の途があつて、その決心がつかぬからである。

即ち夢は埋もれた記憶を喚起して心の底の秘密を語るものであるが、之を寫實的に語るのではなくて象徴的に語るのである。またメエデルも夢占の心得なるものを作製した。それは左の如くである。

夢は無意識的欲求の爲に満足の方法を求めたものであつて、夢こそ眞の自由行動である。夢には若干年間に亘つて記憶に残るやうな夢があるが、此のやうな夢は意識に現はれた明白な心理活動の表現であつて、其人の人格の發達の行程に於ける一種の道標ともいふべく、之によつて其人は自己の進路を考定し得る。

メエデルは之を基礎にして夢を三種の範疇に分けた、(一)能動的な夢は成功又は抵抗の精神の緊張せるもの、(二)靜止的な夢は之に反して澁滯又は退嬰の

精神を示す、(三)先見的な夢は敢て未來のことを豫言するのではないが突嗟の場合に於ける適宜の處置を先見する。

夢占で精神を分析するには、當人をして朝起きた時又は夜中でも目の醒めた時に起きて其の夢を記録せしめるとよい。筆で書いたのと口で語るのとでは効果が違ふ。故に術者は當人に之を朗讀させないで別に口頭で談話せしめ、筆記と談話との双方及び其の比較によつて判断を試みる。文字を消したり、言葉を濁したり、或は原稿と談話と齟齬したりなぞするのは、そこに何等かの意味がある。また夢は斷片的でも夢と夢との間には一條の連絡がある。フロイドの説によれば、夢が斷續するのは常識の検査官が夢に干渉するからであつて、丁度熱病患者の嘔語が斷續的で取り留めの無いやうなものであるが、患者の平生を熟知する者は其の斷片によつて一條の連絡を發見し得るものである。同一の夢を幾度も繰返して物語らせると、その連絡が明白を加へるのみならず、前と

後とて説明に齟齬を來す時に、そこに何等かの意味を發見し得る。蓋し夢の中で曖昧な部分は、表現を憚る部分即ち壓迫の多く加はつた部分であるから、却つて重要な部分である。

夢占に就いて尙ほ注意すべきことには、夢は象徴的に解釋しなくてはならぬが、夢は全體が象徴なのではないから、その何れの部分が象徴なのであるかを確的に判別する必要がある。エンクの取扱つた患者の一人が記録した夢に、
 「私は母と妹と三人で二階へ上つて行つたが、階段を上り終ると、妹は近い内に子持ちになると語られた、云々。輕卒に之を判斷すると、これは兄妹相姦の象徴だなどと考へられるが、エンクが之を解説して曰ふには、これは母や妹よりも階段が象徴なのだ。果して此の患者は暫く仕事を怠つた爲に成功をあせつて居た。そこで階段は成功の象徴、數年以來孝行を怠つた母は仕事の象徴、妹は心の焦るのを静めやうとする心地、子供は心機一轉の象徴であつた。斯くの如く夢の判斷を誤らない爲には勿論相當の熟練を要する。

四 心機の一轉換

精神分析を行ふには患者をして充分に術者を信用せしめ、胸襟を開かせることが必要であつて、さもないと迂遠な方法で多大な時間を費さなくてはならない。しかし患者が如何に術者を信じ胸襟を開いても、術者は決して油断してはならない。蓋し神經病的兆候は實に無意識的虚言であるから、患者自身は之に欺かれても、術者までが之に欺かれてはならぬ。而も其の疑惑的態度を患者に發見せられると、患者は胸襟を閉ぢるのであるから、その疑惑を内に隠して、表面では患者の虚偽に欺かれて居なくてはならない。をかしい事があつても、笑つて善い場合と悪い場合とを巧に判斷しなくてはならぬ。故に甚だ困難な仕事であるが、しかし之を適當に行へば、患者の心機を一轉させ病因を艾

除することが出来る。現にフロイド派では之を「心機の轉換」と名づける。たとへば貧窮や不幸や孤獨や誤解の爲に精神的に負傷して神経病者となつた者などが、分析學者の同情を得て心に思ふ存分の事を聞いて貰ふと、これまで周囲の人々から變人扱ひにせられたと違つて、心が自ら晴々して來て、果は術者を熱烈に愛慕するやうにさへなる。フロイド派では之をも一種の性慾だといふが、必ずしも性慾とは言はれまい、分析學者は相當の學者であるのに、その學者が患者の妄想を眞面目に受取つてくれるのであるから、患者は始めて蘇つたやうに心強くなるのである。また術者も患者に對しては、或は父母となり、或は兄弟となり、或は忠告者となり、或は懺悔僧となり、而も職業道徳を守つて患者の祕密を嚴守するから、患者が之を此上も無く頼もしく思ふも道理である。さうして此の場合の特色として、患者は如何にも子供らしい心理を呈する者である。キリスト教では「更生」といつて、人は生れ變つて嬰兒の如くにな

らないと天國に入ることを得ない」と説くが、分析學者が此の場合に患者に適當な進路を示さへすれば、患者は精神的に更生するのである。神経病者は元來子供臭いが、分析學者は態と偽つて患者の偽りを信ずることによつて彼を極度に子供化するのである。

五 再教育

さて精神分析によつて神経病者の元氣を回復させたら、其の上は之を如何にすべきか。之に關する學者の意見は必ずしも一致しないが、ホワイットの説によれば、「神経衰弱病者には退嬰主義を棄て、現實の世界と健全に接觸せしめることが必要で、それには從來と面目を異にした新しい興味を起さしめ、徐々に健全な物の考へ方に馴れさせ、努力と勤勉との習慣を養はせなくてはならぬ。また強制的神経病や恐怖病を治すには、合理的な心理療法を利用して、患者の

精神生活を適當に調整し、從來の誤つた物の考へ方の代りに、正しい考へを起さするやうに、新しい通路を發見せしめる必要がある。要するに再教育が必要なのである。「囚人は之を監獄から解放するのみならず、更に之に正當な生活の方法を與へなくてはならない。さもないと再び犯罪を繰返す虞れがある。その如く神經病者も再教育が宜しきを得ないと再び病的心理に回る。故に精神分析學者は自ら一種の教育家を以て任じなくてはならない。

しからは再教育の方法は如何といふに、成るべく愉快な生活又は仕事に親しませるのが第一である。「艱難は汝を玉にする」などといふが、艱難は常人にも寧ろ有害である。ましてや神經病者の再教育は兒童を教育するのと殆ど同一であるに於てをや。元來人間は不快な事よりも愉快な事を好むのが自然である。病人を教育するにも、成るべく強制的な態度を避け、當人の好むやうな方法で其の意思と理性と感情とを自由に發達させなくてはならない、若し夫れ兒童教

育に關する分析學の見解に至つては之を次章に於て述べよう。



第十五章 新時代の倫理學

一 今後の教育

分析學者は神話や傳説や童話や藝術に對しても卓拔な批評を下したが、教育及び倫理に對しても獨得の立場から大膽な觀察を試みる。まづ其の教育意見を問ふに、分析學者の立場から言へば、人間は誰でもが自ら分析學者となるべきである。何となれば「自身を知る」のは何人にも必要なことであるから。しかるに在來の教育は果して此の精神に背反しては居ないか。舊來の教育家は兒童をして其の好む所に任せるのを危ぶみ、兒童の好惡に拘らず種々の學科を強制するのであるが、之が爲に精神的病患を醸生することは決して少くない。故に

分析學者は小學や中學でラテン語やギリシア語や代數學を強制的に課するのに反對する。舊式な教育家は斯くの如き學科を課するのが兒童の教育を一方に偏せしめず智力を公平に訓練する所以だとするが、分析學者に言はせると、これは馬鹿げた考へであつて、學生の厭がるものを強制するのは徒に神經病の原因を作るに過ぎない。そんなものを強制するより、現代の活學としてロシア語や日本語や自動車や修繕法でも教へた方がよい。死語や非實用的な數學などを課するより、その方が何程合理的に智性を發達せしめるかも知れない。非實用的な不快な學科は、成程智力を鍊るかも知れない、しかし、それは健全に鍛へるのではない、病的に鍛へ上げるのである。之に反して學生の好む所に任せて置けば、學生は自ら之によつて能力の健全な訓練を行ふ者である。此の意味から考へても、劃一主義の形式教育は甚だ學生に残酷なもので、學生は之が爲に何程その個性の健全な發達を阻礙せられ、不自然な心理に犯されるかも知れない。

い。たとへば自瀆の習癖の如きも餘りに窮窟な教育の結果である例も少くない。かうした悪癖に囚はれると、見る物聞く物食ふ物讀む物が悉く性的妄想を娛しませる材料となり、その妄想に比較すると他の事は餘りに不愉快である爲に、その妄想は愈々益々深刻を加へるのである。

昔ギリシヤの祭禮に、ブラキシテレエズの愛したモデルのフリネといふ美人が、女神アフロディテに扮して、赤裸で水中から現はれたが、其時看衆は一齊に「宗教的沈黙」に陥つたといふ。若し今日の文明國で斯様な事を演じたら民衆は果して神嚴な心理のみで之を見るであらうか。古代のギリシア人は不自然に性慾を壓制せず、極めて自由に行動したが、その結果性慾に關する心理は却つて高尚であつた。性慾すら已に然りである。ましてや其他の方面の教育に於てをや。たとへば音樂の如きは、無味乾燥な樂典や樂譜を暗記させるよりも、優秀な音樂に親しませた方が何程有效であるかも知れない。繪畫も亦た然

り。其他味覺の訓練には、公園や海岸の散歩に自由な時間を與へなくてはならぬ。

自由に放任して置くと自己の好む所に偏する虞れがあると危ぶまれるが、人間には本來種々の欲求、種々の趣味がある以上、自由に放任したからとて、一方に偏する筈は無い。寧ろ其の好まざる學科を一方に強制すると、その反動としてこそ一方に趣味を偏せしめる虞れがある。人間は不快な事と單調な事とは怠惰になり易い者であるが、此點から考へても、強制と單調との間には共通の要素がある。

ユンクは多數の神經病者の精神を分析して大抵の人間には意外に藝術的才能の豊かなのに驚いたが、人間は教育の不良な爲に自己の藝術的才能の大部分を殺して居るのである。人間の所有する藝術的天分に比較して、今日の教育は如何に非藝術的であるか。

以上は西洋の教育を標準にしての分析學者の意見であるが、西洋の教育でさへ斯くの如き批評に値する。ましてや文部省の學務局長すら「日本の今日の教育は世界の文明國に類の無い硬化した形式的劃一教育である」と公言する、その日本の今日の學校教育に於てをや。近時自由畫教育を烽火として藝術的自由教育の機運が勃興しつゝ、あるのは眞に欣ばしきことである。繪畫のみならず、唱歌にも自由唱歌を採用し、更に其他の方面にも教育の自由解放を普及せしめたいものである。

尙ほ右は學生を教育する上での問題であるが、分析學的方法是學生教育のみならず自己修養の方面にも採用せられなくてはならない。若し各人が精神分析を齒磨揚子のやうに毎日常用するやうになれば、箇人的にも社會的にも、どれだけ無用の葛藤を除き得るかも知れない。たとへば夫婦の間でも、男女が精神分析によつて相互の無意識的欲求を明確に察知して之に適宜の満足を與へるや

うに注意すれば、夫婦の愛情も家庭の滋味も著しきを加へるであらう。妻のヒステリーを夫が耻ぢないといふが如きは、之を將來から顧みたら、實に蒙昧な現象であらう。また他人との交際に於ても、「けざらひ」といふが如きは確に野蠻な心理であつて、先に叙べた如く、善人の頭髪が偶々悪人に似て居るからとて、その善人を憎惡する如きは、精神の分析に無知な結果の罪惡である。

二 眞理と自由

舊式な倫理道德では人間を自由に放任すると不正を行ひ自他の間に争ひを生ずる虞れがあるから倫理道德の觀念を以て之を制裁しようとする傾向が顯著であつた。しかし果して人間が其の様な性質の者だとすれば、倫理道德の基礎は甚だ薄弱だと言はざるを得ない。眞の倫理道德は人間の本性の自由な發現でなくてはならぬ、

カントは意思の自由を以て道德の根本條件とした。蓋し若し人間に意思の自由が無くて神佛又は自然の力にのみ左右せられる者だとすれば、人間の行爲は悉く運命の所作であつて人間自身の意思に出たのではないから、人間の行爲は對して道德的義務を感ずることを得ない筈である。故に道德の價値を論ずるには先づ意思の自由を説かなくてはならぬが、分析學的に觀察すると、意思の自由は有るが如く無いが如くであつて、人間の心理作用が一定の理法に支配せられて、人間の意思で勝手に之を左右することの出来ない點から、考へると、意思の自由は無いとも言ひ得るが、しかし意思の自由を拘束する種々の原因は之を理想の力に依つて取除き得る點から考へると、意思の自由が無いとは言ひ得ぬ。分析學者は之に對して如何なる裁定を下すかといふに、大體に於ては自然科學的な決定論に左袒する。『風は己が心の儘に吹く』とキリストは言つたが、科學者の研究した所に依ると、暴風や狂風の如きですら一定の理法に支

配せられて吹くので、自己の自由意思で勝手に暴れ廻つて居るのではない。吾等は食慾や性慾や憤怒を一時的には抑制し得るが、胃の腑の充滿して居る時に食慾を起すとか、性慾の衝動の無いのに性慾を起すとか、腹の立たないのに怒るとかいふことは出来ない、故に此點から考へると意思の自由に自ら制限がある。しかし吾々が理性の力で慾望の性質を明確に理會し且つ之を適當に指導する時には、吾々は之に支配せられないで之を支配し得るのであるから、意思の自由は此の方法によつて之を擴張することが出来る。分析學の倫理的使命も亦た茲に在ると言はなければならぬ。

前に叙べた如く神経病者は一般に「道德的」であるが、しかし是れは舊式な意味に於てであつて、新時代の倫理は神経病者の倫理であつてはならない。神経病者が常人よりも却つて「道德的」であるのは、今日までの道德が神経病的だからである。即ち自己の意思を適當に表現することを知らないうちに、之を抑壓

して病的に表現するのが今日までの「道徳」であつた。

斯様に今日までの人間が意思の待遇を誤つたのは理性が聰明を缺いた結果である。意思の自由は實は理性の自由であつて、理性が聰明である時に始めて意思は自由である。意思が自由に行動し得ないのは、理性が不明である爲に、行爲の價値又は成敗が不確實だからである。不安とか不確實とかいふことは精神に最も有害である。エレン・ケイは若い頃に神の有無が不確實に感ぜられて、之が爲に甚しく煩悶した結果、公然と神の存在を否定した。さうでもしたら神が自身で神の實在を證明するか、又は誰かが之を明確に證明するだらうと考へたからである。しかし大抵の人は神の有無を明確に理會して居るのではない、頗る不確實な考へに停滯して居るから、動もすれば迷信に陥り易く、随分平生は無神論的な思想の人でも、何か事が有ると、我ながら意外に宗教的又は迷信的になる。

神経病者は自己の欲求即ち意思を明確に理解しない結果無意識的妄想に支配せられるのであるが、神経病者でなくても、謂はゆる健全な常人でも、やはり大體に於て然りである、エビクタスは倫理學の目的は實在の現象を聰明に處理するに在ると言つたが、實在の現象とは畢竟自我の表現である。しかるに自我の性質を明確に理會しなくては、どうして之を的當に處理することが出来る。舊式な思想の人々は「自我」と言へば何か善くない我執の如く誤解するが、自我が悪いのではない、誤つた自我の表現が悪いのである。自我の適當な表現を誤るのが悪いのである。しかるに舊來の道徳では、自我の自由な即ち適當な表現を不徳となし、之を抑壓して病的に表現するのを却つて道徳的とする傾きがあつた。自我の眞の欲求を抑へて之を病的に發揮する神経病者が「道徳的」であるのは之が爲である。

吾々は自我の自由な表現を憚ること宛も性慾の表現を憚るが如くである。し

かし人間は最も自由に自我を表現する時に最も崇高である。靈感に打たれるとか、或は無意識的に神祕的現象を直覺するとかいふ場合は、實は吾々の自我が一切の拘束を突破して最も自由に自己を表現した場合である。斯様な場合に人は往々にして自我の自由な表現以外に何か靈的神祕的なものが客觀的に實在する如く迷信するが、それは自我の本性を善く知らないからである。曾てフロイドがブットナムに語つた言に「人間は到底人間であつて、人間以外の何者でもない。人生問題を解釋するには、道徳的評價よりも徹底的知識が必要である」と。神祕を信ずるのは善いが、しかしそれは不可思議を盲信するのであつてはならない、神祕は自我の自由な表現のあることを自覺しなくてはならない。昔から人間の先祖は樂園で智慧の果を食つた結果墮落して神を離れ不幸な境遇に陥つたなどといふ。ファウストも知識の爲に眞理を失つたといはれるが、今日でも知識を咀ふ心理は中々濃厚であつて、たとへば性慾のことを知らせる

教知格物

のは兒童に有害だと考へるやうな人々が少くない。しかし父母が「子供には性慾のことなどを考へさせないで志操を純潔にしないでならぬ」などと考へる結果、兒童は低級な人々から猥褻なことを聞かされて病的な性慾を起すのである。故に知識が悪いのではない、正しい知識を拒絶して誤つた知識を供給することが悪いのである。分析學者はフロイドでも、ユングでも、フェレンチでもみな實驗の結果として、兒童に性的知識を與へないことの不可能などを力説する。しからはば徒に之を拒ばまないで、之に關する正しい知識を與へることが必要である。マウバスの「女の一生」を見ても、シンクレミアの「戀の巡禮」を見ても、性的智識の缺乏が如何に幸福な男女を不幸に陥れるかを知り得る。性的事實は之を露骨に説かないでロマンテックに説明するのが普通であるが、性的事實を一概にロマンテックなもののみ迷信する結果も亦た男女を誤り易いものである。吾々はロマンテックでなくてはならぬが、そのロマンテ

は陷穽を花で蔽つたやうなものではならない、嚴密な事實を基礎にした如實のロマンスでなくてはならない。ロマンスとは眞理の美名でなくてはならない。虚偽や空想の假名であつてはならない。

ニイチエの言に、「奇蹟の信仰を放棄すると、人間は先づ第一に人間は如何に無限の勢力を具へて居るかといふこと、第二には其處から新しい勢力を發揮するには之を如何にすべきかといふこと、第三には如何にして箇人は自己の人格を傷けずに教養を徹底せしめ得るかといふことを考へざるを得ぬ。」之を分析的に翻譯すると、第一に吾々の渴望は如何なるものであるか、第二に此の渴望は如何にして適當な進路を求むべきであるか、第三に病的心理は如何にして之を避け得るかである。然り、人間が自我の欲求をして正當な軌道を走らしめ、衝突も無く葛藤も無く煩悶も無く苦痛も無く、自由に自在に、自我を圓滿に發揮するのが、是れ即ち眞の奇蹟である。さうして此の奇蹟は理性の適當な

活動と自我の明確な理解と——自己を知ることに依つてのみ行はれる。

道德の要諦は心身の健全に在る。健全な精神は健全な肉體に宿るといふ如く、精神を健全にするには肉體を健全にすることの必要なのは明白であるが、「徒然草」にある如く、危険を冒して高樓の額を誌した爲に頭髮が一時に白くなつた例も有るから、精神の健全が肉體の健全の基礎になることを認めなくてはならない。さうして精神の薄弱は意思の薄弱に由るのであるが、意思の薄弱は理性の蒙昧に由るのであるから、吾々は理性を聰明にすることが必要である。或人は言ふかも知れない、「理性の蒙昧は肉體の虚弱に由るのであるから、理性を聰明ならしめるには肉體を健全ならしめることが必要である」と。しかし肉體を健全ならしめることが必要である」と言ふ者も亦た君の理性ではないか。且つ肉體を健全ならしめるにも、理性を適當に働かせて衛生を誤らないやうにしないでならない。古來の倫理道德も眞の聖人哲人によつて説かれた眞の倫

理道徳の要旨は理性の涵養に在つた。キリストの語に「真理は人間に自由を得
 させる」と。然り、真理こそ人間に自由を與へる唯一のものであり、吾々に真
 の自由を與へるものこそ眞に唯一の真理である。吾々は眞の真理によつて眞の
 自由を獲得し、吾々の生活を自由で快活で幸福なものにしなくてはならない。

精神分析學終

不許複製

大正十一年一月四日印刷

大正十一年一月七日發行

著者 井 範 節 三

精神分析學

定價壹圓五拾錢

發行者	東京市京橋區南鍋町二丁目十五番地 增 田 義 一
印刷者	東京市芝區愛宕町三丁目二番地 笠 間 音 次
發行所	東京市京橋區南鍋町二丁目十五番地 實業之日本社 振替口座東京三二六番

東洋印刷株式會社發行

版七十

性慾研究と精神分析學

醫學博士 大澤謙二氏序
醫學博士 榊保三郎氏著

定價二圓菊判
郵稅十二錢函入
總クローヌ製

人間生活各般の根本基調たる性慾に關して科學的研究事實を網羅し、次いで精神分析學を加へて性慾と道德との密接なる關係を説くこと明確なり。又以て國民の自然的道德進歩の資料に供して可なり。

内容

男性生殖器の解剖	性慾と生殖慾	淫亂症
女性生殖器の解剖	性慾亢奮の時期	夢判斷
生殖と靈魂不滅論	性慾亢奮の條件	近親愛
性慾の新しい目的	女子の亢奮の轉移	中陰陽の研究

教育一般性慾學

資料一

科學的見地から大膽赤裸々に解剖した性慾の新研究、萬人必讀の權威的發表。

醫學博士

羽太銳治氏著

定價二圓八十錢 郵稅十二錢 菊判

性慾と近代思潮

六版

近代思潮の基調となれる性慾が文學、哲學及び婦人論に與へたる致命的影響を説く。

醫學博士

羽太銳治氏著

定價二圓 郵稅六錢 菊判

婦人性の研究

五版

歐米諸大家の女性觀を論じ各人の體質、生殖器の構造と其作用、婦人犯罪等を述ぶ。

醫學博士

羽太銳治氏著

定價二圓 郵稅八錢 菊判

性の衛生

四版

男女の性的關係を説き、各生殖器の衛生法及びその疾病の治療法を懇説す。

醫學博士

羽太銳治氏著

定價一圓七十錢 郵稅六錢 菊判

性慾研究と其疾病療法

再版

性慾と戀愛、性交の衛生、妊娠等に關する一般知識及び其疾病療法を述ぶ。

醫學博士

羽太銳治氏著

定價一圓八十錢 郵稅八錢 菊判

新しい主義學說の字引

十六版 思想問題を初めとし、有らゆる新しき主義學說を網羅し、之に解説を施せるもの。
定價三円 郵税八錢 三五判

訂正 新しい言葉の字引

五十三版 どんな新しい言葉でも本書一冊さへ持つてゐれば、その意味が直ぐ分る。
定價一円 郵税四錢 三五判

常識 知らぬと耻

十九版 一寸した事を知らぬ爲に飛んだ赤耻をかく例は甚だ多い、之を見ればそんな事はない。
樋口麗陽氏著
定價一円 郵税四錢 三六判

細胞の靈能と心身養成論

再版 人體の主人公は智能でなくて細胞である、といふ新發見から教育の改造を説く。
安富衆輔氏著
定價二円 郵税八錢 四六判

歐米名士の印象

新刊 著者歐米を漫遊し幾多方面の名士に接見し歸來其深刻なる印象と思想を摘録す。
法學士 鶴見祐輔氏著
定價三円五十錢 郵税八錢 四六判

第六感を交へて

三版 觀察の鋭利、言ひ廻しの奇警、これ博士の文の特色にして、輕妙の諷刺正に人を殺すの概がある。
理學博士 三宅恒方氏著
定價一円八十錢 郵税八錢 四六判

旅と私

新刊 飄逸な著者の旅行中の出來事、感想、挿話及び通信を集めたもの。
理學博士 三宅恒方氏著
定價二円二十錢 郵税八錢 四六判

學者の話

近刊 社會及學界に於る生きた問題を捉へて之を解剖批判したもの。活殺自在の警句全卷に滿つ。
理學博士 三宅恒方氏著
定價未定 郵税未定

心のあと

再版 總て著者最近の作品集。婦人特有の繊細な感覺や鋭利な觀察が隨所に見られる。
三宅博士夫人 三宅やす子女史著
定價一円八十錢 郵税八錢 四六判

婦人生活の創造

新刊 日本婦人界の先覺者たる女史の、婦人の覺醒と教養とに就ての卓見を集録す。
三角錫子女史著
定價一円七十錢 郵税八錢

縮社 會と自分

廿三版

收むる所長短六篇、悉く先生の人格と思潮の發露されたるもの。

夏目漱石氏著
定郵一円五十錢 郵税六錢 三六判

隨筆 ねからね

四版

博士が演劇の改造及び民衆教化等について適當なる意見を述べられしもの。

文學博士
坪内逍遙氏著
定價一円八十錢 郵税八錢 四六判

戲曲 訂修法

八版

日蓮上人の小松原法難を取扱へる脚本にして、博士近來の力作なり。

文學博士
坪内逍遙氏著
定價二円卅錢 郵税八錢 四六判

海文學 へ

十一版

詩人の心眼に映ずる所總て渾然たる一大藝術をなす。我が國唯一の海の文學。

島崎藤村氏著
定價一円卅錢 郵税十錢 四六判

名作物語

三版

源氏物語、死の勝利などといふ内外の名著數篇の梗概を紹介せるもの。

加納幽閑子著
定價一円四十錢 郵税六錢 三六判

骨董鑑賞と鑑定仕方

三版

古美術名品類の性質、名匠の製作來歴、鑑定の秘法等を平明に講述す。

大倉集古館長
今泉雄作氏著
定價四円 郵税十八錢 四六判

風流茶道美談

再版

茶道は日本獨特の趣味である。本書は茶道に関する美談百六十を収め趣味津津。

熊田葦城氏著
定價三円 郵税十錢 四六判

淨瑠璃に現はれた女情操

四版

美しい優しい淨瑠璃に現れた女の物語と現代的の眼光から見た解剖と批判と。

島中雄三氏著
定價一円八十錢 郵税八錢 四六判

易の原理と其應用

六版

科學的新研鑽に基き、周易に関する新解釋と其應用方法を精細に述べたるもの。

法學博士
細貝正邦氏著
定價一円卅錢 郵税八錢 三六判

祖國を顧みて

十六版

深刻なる觀察と學殖とに依り縦横に西洋文明を批判し我國の文明に論及す。

法學博士
河上肇氏著
定價一円廿錢 郵税八錢 四六判

思想善導の基準

四版

帝國の現状を慮り、新時代に順應すべき健全なる思想を鼓吹して愛國の赤誠溢る。

實業之日本社長
増田義一氏著

定價一円五十錢 郵税八錢 四六判

大國民の根柢

七版

新日本人の大常識を詳述し人格涵養の要義を縷説し眞に大國民たるの修養を叫ぶ。

實業之日本社長
増田義一氏著

定價一円八十錢 郵税十錢 四六判

生活戰術

十二版

生活戦場の勝利を得るの根本要素を縦横に論議せるもの、青年諸君の絶好書である。

法學博士
浮田和民氏著

定價一円五十錢 郵税六錢 三六判

自彊術の解説と實驗談

十六版

健康を増進し萬病を癒す自彊術の方法と効果を詳述せるもの、今や實行者數十萬。

中井房五郎氏創始
十文字大元氏編著

定價九十錢 郵税四錢 三六判

忽ち上達する實習寫眞術

九版

從來の寫眞術書では列らなかつた所を初心者にも判るやうに説明したのが大特色。

松山思水氏著

定價一円四十錢 郵税六錢 菊半紙

503
51

終

